

＜株式会社エフエム東京 第476回放送番組審議会＞

1. 開催年月日：令和3年3月度

2. ※新型コロナウイルス感染防止のため、ご参集頂かず、素材の郵送またはメール送付・レポート提出対応といたしました。

3. 委員の出席：委員総数6名（社外6名 社内0名）

◇レポート提出委員（4名）

内 館 牧 子 委員

秋 元 康 委員

佐々木俊尚 委員

松 田 紀 子 委員

◇レポート未提出委員（2名）

ロバート キャンベル 委員長

川 上 未 映 子 委員

2. 番組試聴

【番組名】特別番組『Positive～コロナとホテルとラインチャット～』

【放送日時】2020年11月15日（日）19:00～19:55 放送のダイジェスト  
約30分

※文化庁芸術祭 ラジオ部門優秀賞受賞番組

【番組概要】

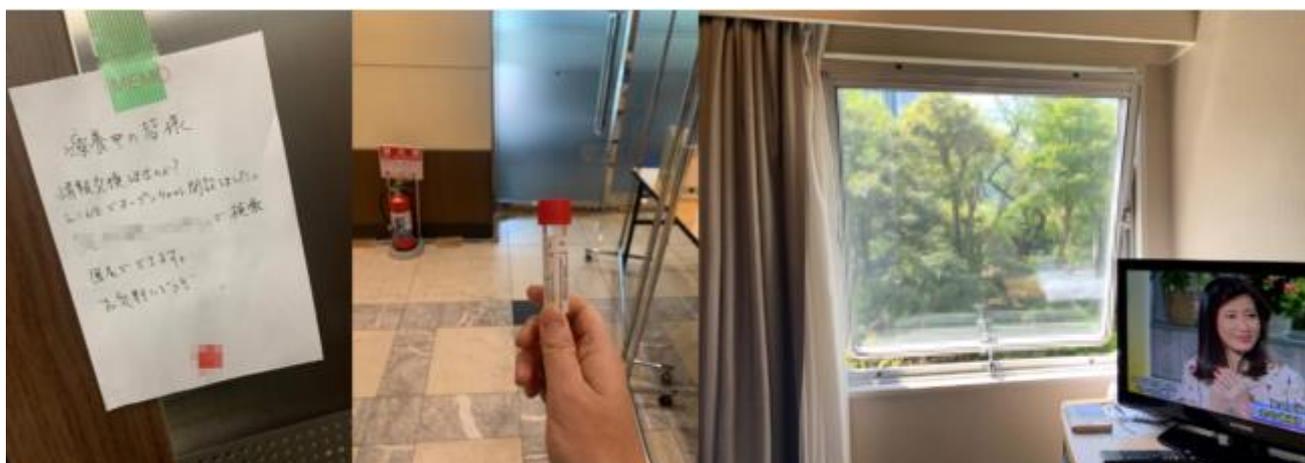
今回ご視聴いただくのは、昨年11月15日（日）に放送した特別番組『Positive～コロナとホテルとラインチャット～』のダイジェストです。本番組は「令和2年度文化庁芸術祭 ラジオ部門」において優秀賞を受賞しました。また、受賞したことを受けて、音声サービス AuDee にて、ディレクターズカット版を公開しました。

この番組は昨年4月に新型コロナウイルスに罹患した、TOKYO FM 編成制作局 報道情報センター所属のプロデューサーが、自らの実体験をもとに企画、制作、そして出演した事実をもとにしたフィクションです。

番組では、新型コロナウイルスに罹患し、療養ホテルに隔離された人々による匿名チャットのやりとりをラジオドラマ化し、Positive（陽性）になったことで生まれた風当たりやハラスメントなどの様々な分断、患者同士の心の交流と結びつきを、医師、社会学者、そして実際のコロナ罹患者の証言も交えてお届けしています。この実体験をベースにした物

語の脚本は、『ゲームの王国』で第31回山本周五郎賞受賞し、『嘘と正典』で第162回直木賞候補となった新進気鋭の小説家、小川哲が担当。ナレーション・主人公役は女優の藤間爽子がつとめました。

<番組プロデューサーの増山が療養ホテル入院中に撮影したホテル内の様子>



(左: 療養ホテル内のエレベーターホールに貼られたチャットの案内。ホテルのメモに書かれている。)

(中央: PCR 検査用の試験管。療養ホテルを退所するには、2 日連続で陰性反応が出る必要がある)

(右: 2020 年 4 月 24 日療養ホテルから撮影)

## 【委員の意見および社側説明】

（「○」委員意見／「■」社側意見）

○地震や火山、水害などの災害と比べ、パンデミックは物語として記憶されにくいという話がある。たしかに災害はたくさんの物語が語られ遺されているのに対し、20世紀のスペイン風邪や19世紀末のコレラは、非常に多くの人々が亡くなったにもかかわらず、有名な小説や演劇、映画などは案外少ない。ガルシア・マルケスの「コレラの時代の愛」ぐらいしかすぐには思い出せない。感染症は劇的な場面が少なく、映像にもなりにくいからだと言われている。今回の新型コロナ禍を考えても、人が目の前で命を落としたり、あるいは間一髪の救助がされたり、というような劇的な場面はほとんど目にしない。たくさんの人が亡くなっているが、それらの死は病院の奥深くの隠された場所で進行しているだけで、家族との最後のやりとりさえ行われぬ。だから今回の新型コロナ禍では、ソーシャルディスタンスやリモートワーク、オンラインでの出会いといった日常社会の延長線を描く作品は出てきているが、実際の病室の場面を描いたものはいまだ非常に少ない。多くの人には病床の様子は共有されておらず、それを知っている人も少なく、映像にもなっていないということ。そういうパンデミックの生々しさを、作品化したらどうなるのか。「Positive」はそういう困難な課題に取り組んだ、たいへん素晴らしい作品だと感じた。匿名のチャットルームを開きそこで患者同士がやりとりするというSNS時代を象徴するような設定に加え、交わされる言葉の端々に苦難の中でもユーモアを保ちたいという切ない願いのようなものも伝わってきて、とてもリアルに患者となった人々の情感を描き出していた。

○コロナ禍における番組作りは気の遣いどころも多岐にわたり、なかなかエンタメとして成立しにくいものも多いと思うが、そんな中、この番組は深刻すぎず、おちゃらけ過ぎず、程よい距離で聴くことができた。

○番組の中で取り上げられていた「ポジティブ」という言葉、コロナでは「陽性」を意味するが、普段私たちが使っている言葉の意味「前向き」ととらえ、様々なポジティブ側面を伝え、「知る機会」を広げてくれていた。まだまだ続きそうなこのwith コロナの世界を、こうした「ちゃんと知り」「ポジティブにもとらえ」「悪いのはウイルスであり、陽性者ではない」という認識を広めてくれる番組は貴重だと感じる。

○テレビや新聞はどうしてもきゅうきゅうとした、生活者の毎日に暗い影を落としがちなニュースが主張、誇張されがち。せめてラジオは、生活者の不安な日々に寄り添い、そっと勇気づけてくれるような魅力を放ってほしいと心から願う。音声一本勝負という限られたコンテンツだからこそ、生活者の想像は広がり、どこまでも遠くへ行けると思う。現実を嘆いていてもしょうがない、そういう「ポジティブ」な心でたくましく生きていきたい。

○ひとつ気になったのは、女性のナレーションの「幼い声」。話し方に甘えた感じがにじみ出ている、座りが悪い気がしました。「わきまえない女論」など、女性性の表現が今後一層厳しい視線にさらされることを思うと、この辺りの「いい大人が甘えた幼い声を出す」という表現文化を徐々になくしていったほうが、将来的には支持されるのではないか。(同じことが、民放のお天気キャスターにも言える)

○素晴らしい。このラジオ番組の台本を書いた放送作家は天才だと感じる。この番組を企画したプロデューサー、演出をしたディレクターも素晴らしい。こんな手間のかかる番組を作った **TOKYO FM** の心意気に惜しみない拍手を送りたい。今までも、こういう報道特番的なものは多く作られて来たと思われるが、ここまで面白く聴けるスペシャル番組があったらどうか？やはり、多くの人に楽しく聴いてもらえてこそ意味がありますよね。“自粛”という言葉に縛られてしまっているこんな時代だからこそ、こういう番組はいいと思う。今まで聴いたどんなラジオドラマより感動した。

6.議事内容を以下の方法で公表した。

① 放送:番組「Ready Saturday Go」

3月27日(土) 6:00~6:40 放送

② 書面:TOKYO FM サービスセンターに据え置き

③ インターネット:TOKYO FM ホームページ内 <https://www.tfm.co.jp/>